

今回は、皆さんが知っているの昔話の中から、「浦島太郎」を古文で読んでみましょう。実は浦島太郎は室町時代に成立した『御伽草子』の中に登場しているのです。「昔話」と言いますが、本当に遙か昔の作品なのですね。今回学習した歴史的仮名遣いの読み方を使って、「浦島太郎」を読んでみましょう。()の中には傍線部の言葉を現代仮名遣いに直したものをひらがなで書きましょう。

昔丹後国に、浦島といふもの侍りしに、その子
 に浦島太郎と申して、年の齡二十四五の男有りけ
 り。明け暮れ海の※うろくづをとりて、父母を養ひ
 けるが、ある日のつれづれに、釣をせむとて出で
 にけり。浦々島々、入江々々、至らぬ所もなく、
 釣をし、貝を拾ひ、※みるめを刈りなどしける所
 に、※ゑしまが磯といふ所にて、亀を一つ釣り上げ
 ける。浦島太郎此亀にいふやう、「汝、生有るもの
 の中にも、鶴は千年、亀は万年とて、命久しきも
 のなり。忽ちここに命をたたん事、いたはしけ
 れば、助くるなり。常には此恩を思ひ出すべし」
 とて此亀をもとの海にかへしける。
※うろくづ…魚のこづ。 ※みるめ…海藻の名前。
 ※ゑしまが磯…絵島ヶ磯。磯の名前。

昔丹後の国に、浦島という者がおり、その人の子どもに浦島太郎と申す、二十四、五歳の男がいた。朝から晩まで海の魚を取って、父母を養っていたが、ある日の退屈なときに、釣りをしようと出かけた。あちらこちらの浦や島、入江などの隅々で、釣りをし、貝を拾い、みるめを刈っているときに、絵島ヶ磯というところで、亀を一匹釣り上げた。浦島太郎が、この亀に言うには、「命があるものの中でも、鶴は千年、亀は万年といって、命が長いものだ。すぐさまここで命を絶つことは、かわいそうなので、助けよう。いつもこの恩を忘れないでおくれ。」と言ってこの亀を海に返した。

どうやら、古典作品の浦島太郎と私たちが知っている浦島太郎は、少しストーリーが違ふようですね。続きはまた今度！